

「緑が育つ手」



豊崎 玲子 (春秋会)

(土佐日記風に) 他の人もすなる園芸というものを
我もしてみんとてするなり

6年ほど前に引っ越した我が家には、狭いながらも(車一台分くらい)庭がある。そのまま放っておくのもさびしい。花木の一つもほしいところだ。折りしも、世間はガーデニングブーム。女性誌をめくるとシロガネーゼや成城マダムが昼下がりに庭先のガーデンチェアにゆったりと座り、取材に答えている。「ええ。緑の中ですごすとくつろげますの。」

共働きで、成城ではなく狛江に住む典型的庶民の私だが、趣味くらいはハイソの仲間入りしたい。それに、庭先が花で覆われている家を見るからに幸せそうだ。「よし、私も」。こうして、私のガーデニング生活は始まった。

むむっ。ガーデニングは肉体労働だっ！

「ガーデニングは土作りから始まる。」園芸書にはこう書いてある。雑誌をみると、憧れの成城マダムが「もちろん土作りから一人でやりましたのよ。」と満面の笑みを浮かべている。

「土作り」とは、要するに、地面を掘り起こして、大きな石を取り除き、堆肥をまぜてふかふかの花壇



春先には、近所の人も誉めてくれるモッコウバラ

を作ることだ。文字にすれば40字程度で収まる作業だが、「書く」と「耕す」では大違い。

正月休みを利用して我が家の「土作り」は始まった。よれよれのジャージに帽子、軍手のスタイルで北風の吹きすさぶ軒下で一人、固い地面と格闘する。掘り当ててしまった7キロはあろうかという瓦礫も一人で掘って処分する。手はかじかみ、背中がキシキシ悲鳴をあげ、寒さのせいで鼻水で顔はぐしゃぐしゃだ。「おりゃー」と雄叫びを上げながら、瓦礫を取り出す私の姿を窓の中から見ている夫が感心して(?)言った。「よっ、力持ち。頼もしいねえ。」

本当に園芸好きの成城マダムは一人でこんなことするのだろうか？彼女たちは、箸より重いものは持たない人種じゃなかったのか？

ガーデニングが趣味という奥様を持つ殿方、うっかり、騙されているのではないだろうか？奥様は決してか弱くなんかない。それどころか、サムソン顔負けの力持ちなのだ。彼女たちは、家人が留守になった昼間、おもむろにシャベルやらつるはしを手にして、自宅の庭で怪力を発揮しているはずだ。

殺虫剤は是か非か？

ガーデニングを始めて即つき当たる問題が「殺虫剤は是か非か」である。

「せっかく自宅で植物を育てるんですから、農薬なんて使いません。」多くの愛好家たちは言う。

なるほど、人体に多大な影響を与えるの農薬は使わないに越したことはない。というわけで、わたしも無農薬で育ててみることに。

ところがどっこい、「言うは易し、行うは難し」とは無農薬栽培のことだ。環境にも人にも優しい無農薬栽培は、当然、害虫にも病原菌にも優しい。無農薬栽培の最大かつ唯一のコツとは、毎日、葉っぱを

一枚一枚ひっくり返して異常がないか確かめることだ。しかし、芽吹いたばかりの植物ならともなく、初夏ともなれば、どんな植物だって葉が生い茂る。いちいちめくって確かめるなんて、とても無理。

そんなに神経質にならなくても、気を許すと大切なトマトやバラの葉は、青虫の餌場と化してしまう。こうなると葉を触るのさえ怖くなる。何気なく葉っぱを触るとその瞬間、ムニユっとする青虫の感触が指に伝わってくることもあるからだ。

「毛虫は箸でつまむとよいでしょう。」と園芸書には書いてある。集めた虫は焼き討ちにするか、指や、長靴で踏み潰せということらしい。

虫も殺さぬ顔をした、家庭菜園を営む奥様たちだって、割り箸片手に毛虫退治に精を出しているのだ。園芸家、恐るべしである。

ビオトープに挑戦

「ビオトープを作ろうよ」

夫のこの一言で、ビオトープ作りが始まった。

ビオトープは、「野生の動植物が生息・生育する空間」の意味する。家庭内ビオトープとは、庭先に生物が食物連鎖をする環境を作り出すことだ。

「毛虫が来て蝶になる」我が家は、すでに立派なビオトープだが、もうちょっと我々にも心地よい環境を作りたい。水草が生い茂る小さな池からトンボが涼しげに飛び立つ姿がみたい。

めだかを入れた水がめを外に置く。自然にボウフラが沸いてめだかの餌になる。そこへトンボがやってきて、ヤゴを産み付ける、ヤゴはめだかを餌に育ててやがてトンボになって飛んでいくという寸法だ。

ところが。ビオトープ計画は完全に失敗だった。そもそも、ボウフラがわかかなかったのだ。原因は不明。そういえば、今年は1回も蚊にさされていない。蚊が家の周りにはいなくなってしまうらしい。ボウフラがないからめだかの餌もない。トンボも来ないのでヤゴもない。水草だけが順調に育っている。

何の食物連鎖も起きていないのに、なぜか、めだかの数が減っていく。死体が浮かんでいるわけでも



めだかを襲撃する我が家の猫。現行犯だ！

ない。不思議だなあと考えて矢先、理由が判明した。食物連鎖の現場を見たいという主人の気持ちを慮ってか、我が家の飼い猫が、日々めだかを襲撃していたのだ。

猫を捕まえて、話しかけつつ、ため息をつく。

「お前を誰かが食べなきゃ食物連鎖にならないでしょ。食われたいか。」

グリーンハンドに憧れて

思い入れの半分程度の成果であるにせよ、我が家にも、季節ごとに何らかの花が咲いたり、実がなるようになった。こうなると俄然、庭仕事は楽しくなってくる。日頃のデスクワークとは、使う頭も体も全く違うところもいい。

ガーデニングがハイソミセスの趣味の代名詞という思い込みは、実際にやってみて、いとも簡単に崩れ去った。庭仕事は限りなく泥くさい仕事だ。だからといって止める気にはならない。

園芸の達人の手を「グリーンハンド（緑が育つ手）」という。例え、それが青虫を指でつかめる手を意味するとしても、土いじりで、ごつごつした手になることを意味するのあっても、いきいきとした緑に囲まれて暮らせるならば、それもいい。ヘルマン・ヘッセ、ルノワール、モネなどの著名人たちの手はみんなグリーンハンドだった。「私だっていつかは、きつと」と野心に燃えつつ、割り箸片手に、青虫退治に勢を出す今日この頃である。

以上